

## 令和3年度 奈良市立左京こども園 研究実践概要

園長名 鍋谷 理佐子

全園児数 132名

1. 研究主題 心豊かに生き生きと活動する子どもの育成  
— 『もっとしたい』遊びの充実を目指して—

2. 研究年度 初年度

### 3. 研究主題設定理由

子どもは遊びを楽しみ夢中になり、充実していく中で豊かな経験を積み重ねていくと考える。豊かな経験から生き生きと活動する子どもを育みたい。

子どもたちが主体的に遊び、「もっとしたい」「どうなっているんだろう」と好奇心や探究心を育めるような環境構成や援助を探りたいと考え研究主題を設定した。

### 4. 具体的な研究内容

#### ①研究のねらい

子どもたちが主体的に遊びをつくりだし、遊びに没頭し、「もっとしたい」という意欲をもって遊びを進めていける子どもを育む。

#### ②研究の重点

子どもの発達、成長に応じた取り組みを行い、一人一人の内面に寄り添い、「どうなっているんだろう」「やってみたい」「もっとしたい」など、子どもの好奇心や探究心を育めるよう環境を整え子どもの発想を活かした保育を実践していく。

#### ③活動の方法

- ・園内研究会を実施し、多面的に振り返る場をもつ。
- ・子どもたちの「楽しい」「もっとしたい」思いを受け止め、意欲的に遊ぶ環境構成や援助を探る。

[3歳児] 「マクドナルドやさん」 [10・11月頃] 援助 環境構成

ママごとのごちそうを並べながら「マクドナルドやさんです」「ポテトどうぞ」とごっこ遊びをしていたので「ほんとにポテトつくってみる?」と提案してみた。すると、「つくる!」「どうやってつくるの?」とたくさんの子が集まってきた。「なにでつくろうか」「ポテトって何色?」と子どもに尋ねてみると「きいろ」「画用紙でつくったらいいんじゃない」とアイデアが出てきたため、画用紙やテープなどの素材を用意した。画用紙をくるくると丸めながら「みて、ながいポテトができた」と友達と見せあいながらたくさんポテトをつくり、マクドナル

もっとしたい  
ポイント

簡単に本物の  
ようなポテトが  
できると楽しく  
なり、もっと  
つくりたいと思  
っている。

ドやさんごっこを楽しんだ。ポテトが出来上がったことで、後日ハンバーガーやナゲット、ジュース、枝豆とコーンなど他のメニューもつくろうということになり、段ボールや紙粘土に色を塗ったり、カップに画用紙を入れたりしてつくっていった。遊びが進むにつれ「かぶるものもあったらいい」「メニューもかこう」「持ち帰りもできるようにしたい」と、思ったことを保育者に話す。子どもの思いを受け止め、その都度必要な用具を増やしていった。

つくったポテトで遊んだことが楽しかったから、もっと他のメニューもほしい、つくりたい。

最初は保育室での遊びだったが、外遊びの時間もしたいという声があったため、机を廊下に出した。「いらっしやいませ」と他のクラスのお客さんも呼び込みながら、友達と一緒に繰り返し楽しんだ。



店で見たものを友達や先生と一緒につくって遊びたい、つくると楽しそうと思う。

#### (評価)

- ・イメージしながら遊んでいる子どもの姿から、本物みたいなポテトがあればより遊びが楽しめるのではないかと考え、その場ですぐに素材を用意した。子どもと相談しながら誰でも簡単につくれる素材や方法を考え提案することで、すぐにつくれた喜びが感じられ繰り返しつくることを楽しむことに繋がった。
- ・誰もが知っている“マクドナルド”ごっこだったため、途中から遊びに入っても戸惑うことなく誰でも遊ぶことができた。また、ナゲットはこのお皿、持ち帰りはこの袋に入れるなどの遊び方やメニューなどクラス全員が共通理解しており、店員役もお客さん役どちらも楽しむことができた。実際に経験したことのある店だったことから、他のメニューや店にあるものを、友達や保育者に話すことができた。また、その思いを受け止め実現させていくことで日々ごっこ遊びが充実し遊びを継続していくことができた。

[4歳児] 「そんなかんじ！」 [11月]

援助 環境構成

もっとしたいポイント

10月から葉っぱや木の実を使ってBBQごっこをする姿が見られた。11月に入ってしばらくして、お客さんと店員さんとに分かれて「もりのBBQやさん」をするようになった。

BBQやさんを楽しんでいたが、もっと他に何かあれば楽しめるのではと感じている。

BBQやさんを楽しんでいた子どもが、「何かまだ足りないんだけど何やろ」と保育者に相談に来た。「何があったらもっとお店屋さんっぽくなるのかな」と一緒に考え、クラスで相談することにした。「BBQやさんに何があったら楽しいかな？」と問いかけてみると、「帽子！」「そうや！アイスクリーム屋さんにも帽子あるで」と話した。「帽子があれば誰が店員さんなのかすぐに分かるね」と保育者が子どもの考えに共感した。「うん帽子！先生、帽子が欲しい」と保育者に話す。「いいね、帽子つくってみよう」と思いを受け止めた。

帽子があったらもっと店員さんっぽくなれると考えている。

保育者が、「アイスクリームやさんと同じ帽子(サンバイザー型)？もっと違う形？」と子どもたちに問いかけると、「長い帽子やで、上のほうがもこもこしてるねん」「色は白色やで！」と答えた。保育者が、ホワイトボードに絵を描いて「こんな形かな」と見せると、「そんなかんじ！」と答え、他の子どもたちもうなずいた。

帽子の形が決まったことで、次の日からの遊びを楽しみにしている。

次の日から、つくったBBQやさんの帽子をかぶって「いらっしやいませ、何にしますか？」と店員さんになりきって遊ぶ姿が見られた。



(評価)

- ・子どもの、「もっとしたい」という気持ちを受け止め、意欲的に遊べるよう、子どもたちの考えや思いを引き出しながら遊びを進めていった。そのため、その場ですぐに答えを出さず、クラス全体に問いかけてみた。そうすることで、こんなものがあったら楽しいなど思いを出し合い、遊びに期待をもつことができた。
- ・自分の考えを友達や保育者に受け入れてもらえた嬉しさや、クラスで話し合い、自分も一緒にやってみたいという思いから、たくさん子どもたちが一緒になって遊ぶことができた。
- ・帽子をつくったことによって、お店屋さんとお客さんの役割が明確になり、子どもたちでやりとりをするようになった。また、BBQやさんという共通のイメージをもって遊びを進めることができた。

[5歳児] 「やった！浮かんだ！！」 [7月] 援助 環境構成

もっとしたいポイント

戸外で水遊びをする中で、いろいろな素材を使って浮かべることが楽しんでいた。遊びの話し合いでは、空き箱でつくった船は壊れてしまったことをみんなで共有した。その中で、「箱は紙やから溶けるねん」「でも、牛乳パックは溶けへんかった」「牛乳パックはつるつとしてるから、溶けへん紙やねん」「牛乳が入ってるから」など伝え合う。また、素材をくっ付けるための物についても考えを伝え合った。

水に浮かぶ船をつくりたい。



つくった船を実際に水に浮かべることが楽しみにしながら、自分なりに考え、スチロールトレイやカップ、空き箱、スチールトレイ、ヤクルト容器、牛乳パック、セロテープ、ガムテープなど様々な材料用具で船づくりをする。話し合いを製作に活かし、強い布ガムテープを使ってつくる幼児もたくさんいた。また、自分なりに考えて、セロハンテープを何重にも貼る幼児もいた。出来上がるとすぐにビニールプールに浮かべて、「浮かんだ！」と満足そうな様子であった。遊んでいるうちに、テープがすぐにとれてしまったり、空き箱を付けていた船は沈んだり、ふにゃふにゃになって崩れてしまったりした。保育者が「空き箱つぶれちゃったね」「どこが取れたの」「どのテープで貼ってた」など問いかけると、なぜ壊れてしまったか考え、修理をして、また浮かべて遊ぶ姿が見られた。

水に浮かべても壊れない船をつくりたい。



後日、大きなプールで船を浮かべて楽しんだ。また、テープを使って船が壊れてしまった幼児はボンドを用いて作っていた。

できた船を大きなプールに浮かべたい。

(評価)

- ・つくった船をすぐに実際に浮かばせて遊んだことで、船が浮かぶ楽しさを味わったり、素材の違いに興味をもったりすることができた。また、繰り返すつくりや浮かべたりする機会をもったことで、様々な材料用具を使って試してみる姿につながった。
- ・遊びの後の話し合いで友達の考えを聞いて、さらに試してみたい、もっとしたいという思いが強まり、継続して遊ぶ姿につながった。

## 5. 研究の成果

3歳児は、見守ったり思いを受け止めたりする保育者が傍にいて安心して遊べる。安心感、安定感が得られる環境の中で、しっかりと思いを聞いてもらう経験を積み重ね、ありのままの自分が出せる保育者との信頼関係が基盤となり、3歳児なりに「もっとしたい」につながった。4歳児では、保育者が子どもの思いや気付きを受け止め、タイミング良く声をかけ、クラスで話し合うことで、自分の思いを友達や保育者に受け止めてもらう嬉しさを感じることができた。また、友達や保育者と話し合いをすることで、共通のイメージをもって遊びを進めていくことができた。5歳児では、遊びの後の話し合いで友達の考えを聞いて、さらに試してみたい、もっとしたいという思いが強まり、継続して遊ぶ姿につながった。そのため、遊びの後の話し合いをする大切さを改めて感じた。保育者は話し合ったことをふまえ、援助や環境構成を行なうことができた。それぞれの年齢や発達により、引き出し方は異なるが、子どもの思いや考えを受け止めることが「もっとしたい」につながり、遊びの充実につながった。

今回、年齢に応じた援助や環境構成について話し合い確認し合い進められたことで、内面理解の大切さや、遊びと環境の関係を意識的に捉えることの大切さ、自己肯定感を育てていくことの大切さを再確認できた。

## 6. 今後の課題

心ゆくまで遊び、遊び切ったという満足感を味わい自己表現をする喜びを感じながら心豊かに生き生きと遊ぶ子どもを育むために、保育者間で保育の振り返りを行い、連携を深め、引き続き取り組んでいきたい。

日々の保育が子どもの主体性を尊重し「もっとしたい」につながっているか、園の教育目標を基に保育実践に活かされているか職員間の共通理解を高めていくことが必要であると考える。